

親鸞と聖徳太子信仰

広島経済大学教授 渡辺 郁夫

(要旨)

親鸞が念仏者として阿弥陀仏信仰をもっていたことは言うまでもないが、また親鸞は聖徳太子信仰の持ち主でもあった。親鸞の聖徳太子信仰は法然門下に入る以前からあったと思われ、法然門下に入る際にもそれが大きく関係し、また晩年に至るまで一生続き、親鸞は太子に強い思慕の念を抱いていた。親鸞の聖徳太子信仰は四天王寺における聖徳太子信仰と深い関係にあったと思われ、四天王寺に伝わる文書も四天王寺の本尊の仏像も親鸞の聖徳太子信仰に大きく関係していると思われる。親鸞にとって最晩年に至るまで聖徳太子信仰は一貫して重要な位置を占めており、阿弥陀仏信仰さらには本願思想に包摂される形をとりながら、親鸞の聖徳太子信仰は四天王寺における聖徳太子信仰と深い関係をもちつつ親鸞自身を導いていたことがうかがわれるのである。

Shinran and Prince Shotoku faith

Ikuo Watanabe

Although Shinran had the Amitabha faith as a Buddhist invocation person, Shinran was also an owner of the Prince Shotoku faith. It seems that there was Shinran's Prince Shotoku faith before going into the Honen disciple. It was greatly related also when going into the Honen disciple. Shinran has borne the sense of longing strong against Prince Shotoku. It continued throughout life till Shinran's later years. It seems that Shinran's Prince Shotoku faith had the Prince Shotoku faith in Shitenno-ji, and a close relation. The document handed down by Shitenno-ji, and the Buddha statue of the principal image of Shitenno-ji are considered to be greatly related to Shinran's Prince Shotoku faith. Shinran's Prince Shotoku faith has taken the form which is included in the Amitabha faith and also is included by the thought of the Primal Vow. It seems that it had led Shinran itself throughout life.

一 はじめに

親鸞が念仏者として阿弥陀仏信仰をもっていたことは言うまでもないが、また親鸞は聖徳太子信仰の持ち主でもあった。親鸞の聖徳太子信仰は法然門下に入る以前からあったと思われ、法然門下に入る際にもそれが大きく関係し、また晩年に至るまで一生続き、親鸞は太子に強い思慕の念を抱いていた。親鸞の聖徳太子信仰は四天王寺における聖徳太子信仰と深い関係にあったと思われ、四天王寺に伝わる文書も四天王寺の本尊の仏像も親鸞の聖徳太子信仰に大きく関係していると思われる。すでに広く知られ

ている資料を通してではあるが、あらためて四天王寺との関係を中心に親鸞の聖徳太子信仰について考えたい。

二 浄土真宗、法隆寺、四天王寺における聖徳太子信仰

(1) 各寺院における聖徳太子信仰について

親鸞を開祖とする浄土真宗が日本における聖徳太子信仰において重要な役割を果たしてきたことは間違いない。浄土真宗の寺院では本尊は当然のことながら阿弥陀仏であるが、本堂の内陣の余間には聖

徳太子の絵像が掛けられて崇敬の対象になっている。その像は柄香炉を持つ太子孝養像^(図1)と言われるものである。親鸞が尊崇した浄土七高僧も一幅の掛け軸として余間に置かれるが、一幅の中にそれだけの人数が入ると個々の高僧の図像は見えにくいのが実情だろう。その七高僧の中には親鸞の直接の師である法然が入っている。結果的に堂内ではその法然の像よりも聖徳太子の像の方が存在感が大きくなっている。

親鸞の浄土思想を考える上では当然のことながら師である法然の存在が大きい。聖徳太子は聖徳太子信仰においては浄土願生者という位置づけではあるが、聖徳太子の浄土信仰について平安時代以降に見られるような浄土信仰を直接見いだすのは難しい。そのように思想的には法然の方がはるかに重要なはずだが、親鸞においては聖徳太子信仰が極めて重要な意味をもち、法然への帰依も聖徳太子信仰を通して起きたと言える面があり、また親鸞の九十年の生涯の最晩年まで聖徳太子信仰は変わることはなかった。またその聖徳太子信仰には聖徳太子像と見なされた仏像が関係しておりそのことが親鸞の著作から分かる。

現代においては、先にあげた浄土真宗寺院を別として聖徳太子信仰の寺院としてあげるなら奈良の法隆寺と大阪の四天王寺の両寺が双璧を為すだろう。法隆寺は戦後に法相宗から独立して聖徳宗となり、また四天王寺も戦後に天台宗から独立して和宗となり、ともに今も参詣の人が絶えない。ただし文化財的な観点からは世界遺産として日本のみならず世界最古の木造建築とされる法隆寺に対して、四天王寺の中心伽藍は太平洋戦争の戦禍のために焼失し、現在の中心伽藍は鉄筋コンクリート造りである。歴史的にはほぼ同等とっていい歴史をもつ両寺院でありながらそのたたずまいは対照的である。

伽藍のみならず仏像においても同様である。聖徳太子信仰において中心的な役割を果たしていると言える救世観音像においてそれは顕著で、法隆寺の救世観音像は夢殿にあり、長らく秘仏だったために非常に保存状態がよく国宝に指定されている。その姿は仏像としては人間に近い姿であり、聖徳太子像と見なされて崇敬の対象になっている。ただし法隆寺

の救世観音像は東院伽藍の夢殿にあるもので、西院伽藍の中心である金堂の本尊ではない。金堂の本尊は釈迦三尊像である。四天王寺の場合は先に述べた戦禍のために現在の本尊は戦後のものだが、四天王寺の場合は救世観音像は金堂の本尊である。その点では四天王寺の方が聖徳太子信仰がより前面に出ていると言えるかもしれない。

先に述べたように法隆寺と四天王寺の関係は聖徳太子信仰においては双璧を為すと言ってよいものであり、また古来そのように見なされてきた。史実かどうかは別にして『日本書紀』には聖徳太子の事績と四天王寺の創建とが結び付いた形で書かれており、四天王寺は聖徳太子創建の寺とされ、人々は長らくそれを信じてきた。『日本書紀』の記述からは創建の順は四天王寺、法隆寺の順になる。それを否定する近代史学の学説や発掘調査から導き出された考古学的知見が一般化しているかどうかという点と疑問である。聖徳太子伝としては『上宮聖徳法王帝説』が岩波文庫に入っていることもあり、『日本書紀』と合わせて読まれることが多いだろう。聖徳太子に関心がある人が『日本書紀』と『上宮聖徳法王帝説』を読んだ程度程度の知識を得るとというのが一つの形かもしれない。『上宮聖徳法王帝説』は法隆寺系の資料と考えられ、『日本書紀』の場合は四天王寺系の資料の影響が強く関係していると考えられることから『日本書紀』と『上宮聖徳法王帝説』を読むことは四天王寺と法隆寺の関係からも一つのバランスのとり方ではないかと思われる。

それでは初めに述べた親鸞の場合はどうかというと、かなり四天王寺系の資料に重きを置いた形になっている。極端に言えば現代にまで繋がる聖徳太子信仰と四天王寺信仰の形がそこに見えると言ってもいいほどである。四天王寺には浄土信仰が入り、また親鸞が元天台僧で四天王寺は天台の影響が強かった。親鸞の天台での師の慈円も親鸞が比叡山を下りた後だが四天王寺の別当を務めており、それらのことからすれば当然かもしれない。

親鸞の聖徳太子信仰はその聖徳太子和讃に顕著で、『皇太子聖徳奉讃⁽¹⁾』(七十五首・八十三歳)、『大日本國粟散王聖徳太子奉讃⁽²⁾』(百十四首・八十五歳)、

『皇太子聖徳奉讃⁽³⁾』(十一首)の三種類計二百首ある。浄土真宗の寺院に浄土七高僧像が掛けられていることを述べたが親鸞は浄土七高僧も和讃に詠んでいて三国伝来の順にあげるとインドでは龍樹が十首、天親(世親)が十首、中国では曇鸞が三十四首、道綽が七首、善導が二十六首、日本では源信が十首、源空(法然)が二十首である。詠まれた和讃の数が尊崇の程度を表すかというところ単純ではないが、ある程度関係があると考えるのが自然だろう。この七高僧の『高僧和讃』とは別に先に述べたように聖徳太子和讃が三種類あるが、『高僧和讃』の末尾に「天竺」「震旦」「和朝」として上記の七高僧の名をあげた後に、親鸞は聖徳太子の名をあげており親鸞にとって聖徳太子は七高僧に並ぶ存在であったことがわかる。『高僧和讃』の末尾に聖徳太子の名をあげながらもそこに聖徳太子和讃を入れなかったのは、親鸞の考える浄土思想の展開としての七高僧の流れに聖徳太子を入れるのは無理があったからであろう。また聖徳太子は皇太子として摂政を務め、出家していないのでそのことから七高僧に入れるのは無理がある。このことは親鸞の名著『教行信証』の一部で単独で読まれる「正信念仏偈」でも同様に七高僧は入るが聖徳太子は入っていない。聖徳太子の位置づけが著作により一貫していないように見える。そのようなことから親鸞の聖徳太子信仰は浄土信仰や阿弥陀仏信仰との整合性がとりにくい印象をもたれるかもしれない。

親鸞の聖徳太子信仰は聖徳太子への熱烈な思慕の情が中心で、例えば聖徳太子和讃には「七十五首和讃」と「百十四首和讃」で、この後述べる『四天王寺縁起』にある「戀慕渴仰」という言葉が使われている。「七十五首和讃」では文脈からは親鸞自身の心情を表すわけではないが「戀慕渴仰」には親鸞の心情が投影されていることは間違いないだろう。「戀慕渴仰」は親鸞の聖徳太子信仰のキーワードと言える。『バガヴァッド・ギーター』の「バクティ・ヨーガ(bhakti-yoga)」に通じる心情といえるだろう。「戀慕渴仰」は『法華経』「如来寿量品」では釈尊・如来への心情を表すものとして使われているので『四天王寺縁起』は釈尊と聖徳太子を重ねていると思われる。

(2)『四天王寺縁起』について

これだけの数の聖徳太子和讃を作るのには資料が必要になるはずで親鸞自身がそれについて述べている。最も依拠されているのは四天王寺の影響が強いと思われる『聖徳太子伝暦』であり、またさらに『聖徳太子伝暦』の影響下にある『三宝絵(詞)』も用いられている。さらに和讃の中に明確に「太子手印の御記にいはいはく」という一節があり、この「太子手印の御記」とは『四天王寺縁起⁽⁴⁾』のことで聖徳太子の手印が押されているというものである。この『四天王寺縁起』は「根本縁起」とそれを書写した「後醍醐天皇宸翰本」がありともに国宝に指定されている。当然のことながら親鸞の時代では「根本縁起」である。何度も焼亡を繰り返した四天王寺の歴史の中では貴重な国宝指定の文化財になっている。

この『四天王寺縁起』は聖徳太子が自ら在世中に書いたという形を取り、またその証拠として聖徳太子の手印が押されているというものであり、聖徳太子の姿とされる本尊の救世観世音像とともに四天王寺における聖徳太子信仰においては極めて重要なものである。寛弘四年(1007年)に四天王寺の金堂内で発見されたとされているが、聖徳太子作というのは後世の仮託であり、発見された寛弘四年(1007年)ごろに作られたというのが実態と思われる⁽⁵⁾。『四天王寺縁起』という名からすれば『日本書紀』にもある四天王寺創建の由来が中心でありそれは間違いないのだが、この書物が特殊なのは四天王寺創建という過去の出来事だけでなく、聖徳太子の「未来記」と言われるものが入っている点である。これが四天王寺の聖徳太子信仰において極めて重要な意味をもってくる。後に述べるように親鸞もまたそこに飲み込まれるような印象をもったのではないと思われる。仮に寛弘四年(1007年)ごろに聖徳太子に仮託して「未来記」を作るとすれば、聖徳太子没の622年からすでに四百年近く経っているのだから、その間のことを書けばすでに実現していることなので予言の形をとって正確な出来事を書くことができる。ことごとく当たる予言の形を取れる。それに近い面もあるがそういう形にはなっていない。むしろ寛弘四年(1007年)以降のことを書いているように読める

内容になっている。

寛弘四年(1007年)のころは藤原摂関政治の全盛期の時代で平安時代の一つのイメージがこの時代にあるのではないと思われる。雅な王朝文化を代表する『源氏物語』や『枕草子』が書かれた時代である。少し下るが藤原道長が「この世をば我世とぞ思ふ望月の虧けたる事も無しと思へば」と詠んだとされるのが寛仁二年(1018年)である。そのような時代に世に出た「未来記」は恐ろしい内容で権力者側からは危険思想ともとれるものである。その一方で源信(942年～1017年)の『往生要集』が寛和元年(985年)にすでに書かれている。それからすれば浄土信仰の要素をもつ『四天王寺縁起』の「未来記」は「厭離穢土 欣求浄土」の思想や「末法思想」の反映と考えられる。

『四天王寺縁起』における「未来記」に当たる部分から一部を引用する。「～定知仏法滅尽畢、当于斯時、王位日競、君臣愆序、奪諍国務、父子義絶、国王后妃、其数満国、官物滅亡、王臣相共恒乏飢渴、鬼神悉嗔、疾疫日日、百姓擾乱、兵殺綿々、可哀可傷～」。仏法の滅尽とともに国が乱れるということであるが、この記述は寛弘四年(1007年)より前の時代やその当時というよりは、この後の平安末期から鎌倉時代にかけての世相を描いているような記述である。多くの人はず『四天王寺縁起』を聖徳太子が書いたと信じたであろうし、またそこまでではなくても時代が下るにつれて、ここに描かれることが発見されたという寛弘四年(1007年)以後のことであることに驚いたであろう。それらの時代をすでに経た後醍醐天皇がこれを書いたのはそのような気持ちからであろう。後醍醐天皇自身の人生もこの「未来記」の中に描かれているようにも読める。そしてその後も四天王寺は幾たびも戦禍に巻き込まれ焼亡し、先に述べたように太平洋戦争時までそれが続いたのである。政治体制も幾たびとなく変遷と興亡を繰り返してきた。四天王寺の歴史、また日本の歴史は「未来記」にある通りのように展開したと思われたであろう。

この点で四天王寺は比較的安定した形を保ってきた法隆寺とは対照的である。そのように見ると四天王寺における聖徳太子信仰は動乱の歴史を生き抜い

てきた動的な要素があり、静的な美しさをもつ法隆寺の聖徳太子信仰とは対照的なのである。またそれにより両者が補い合う形で聖徳太子信仰が形成されてきた面があるように思える。『四天王寺縁起』の「未来記」には作者の意図を越えてその要素が入っていると言えるだろうし、それもまた聖徳太子信仰の立場から見れば聖徳太子が作者にそう書かせたのだとも言えるだろう。親鸞が本願力という本願の力動性、躍動性に力点を置いたことが動的な聖徳太子信仰の要素をもつ四天王寺の側に傾斜する理由の一つとして考えられる。儒学が静的な朱子学と動的な陽明学の両面をもっているのと同様のことが聖徳太子信仰にもあるように思われる。

三 親鸞自身の問題と聖徳太子信仰

(1) 「未来記」と親鸞

それではより具体的に親鸞の場合を考えたい。「太子手印の御記にいはく」と書かれた和讃を含む聖徳太子和讃は七十五首から成る『皇太子聖徳奉讃』である。建長七年十一月親鸞八十三歳の時のもので、それまでに平安末から鎌倉時代への動乱、聖徳太子六百回忌の年に起きた承久の乱を経験し、なおかつ自身が師の法然とともに流罪になる「承元の法難」という痛ましい経験をしている。それを『教行信証』に「主上臣下、背法違義、成忿結怨⁽⁶⁾。」と述べている。国全般の混乱に加え親鸞自身に起きたこともそこにあった。「主上臣下、背法違義、成忿結怨。」は『四天王寺縁起』の「未来記」の中に置いてそのまま読めそうな内容である。親鸞を流罪にした朝廷側は承久の乱では逆に幕府により流罪になっている。

この法難に関係して考えられるのは親鸞の改名で、夢の告げによって法然から与えられた「綽空」の名を改めたことを『教行信証』に記している。改名した後の名を「善信」とするとその名は『日本書紀』によれば日本最初の出家者で尼僧である善信尼と同じ名である。善信尼は聖徳太子と同年の生まれで物部守屋による排仏に遭い、日本最初の法難の受難者になっている。物部守屋による排仏に関係している点では四天王寺の創建縁起と関係があり、『四天王寺

縁起』も物部守屋を強く非難し、それを親鸞も継承している。親鸞自身が法難の受難者だったからだろう。『四天王寺縁起』に親鸞が惹かれるのは自身の体験が大きく関係していると考えられる。なおこの善信の名は親鸞と名乗った後も併用され房号と見なされている。

さらに親鸞自身に大きく関係するのは『四天王寺縁起』の「未来記」の「父子義絶」である。実際に親鸞が子息の慈信房善鸞を義絶するという痛ましい事件が起きた。親鸞の「慈信房義絶状」があり建長八年(1256年)五月二十九日付である。『皇太子聖徳奉讃』(七十五首和讃)が書かれた半年後になる。聖徳太子和讃と『四天王寺縁起』、善鸞事件の関係はすでに指摘されている⁽⁷⁾。屋上屋を架すことになるがあらためて「未来記」の「父子義絶」と「義絶状」の関係を考えたい。善鸞が関東で起こした混乱は「義絶状」の出る前から親鸞を悩ませていたと思われる。『皇太子聖徳奉讃』が書かれる時点ではまだ義絶には至っていないが「義絶状」を出した後に聖徳太子の予言が当たっていたことを思い知らされるというのが一つの考え方だろう。あるいはまた善鸞への対応に悩んだ親鸞があらためて『四天王寺縁起』を読みこの和讃を書いたことで『四天王寺縁起』の「父子義絶」が太子からのメッセージとして受け止められ、対応に迷う親鸞に義絶という最終決断をさせたとも考えられるだろう。太子をとるか善鸞をとるか。親鸞の太子信仰からすれば壮絶な形ではあるがそれもまた太子の導きと受け止められた可能性もあるだろう。

(2) 太子像と親鸞

親鸞が僧でありながらなぜ子息がいたかという親鸞が恵信尼と結婚したからで、それが聖徳太子信仰と関係があったことが分かっている。そのことは奇しくも大正10年(1921年)の聖徳太子千三百回忌の年に西本願寺で『恵信尼消息』⁽⁸⁾が発見されて判明した。そこに親鸞が法然門下に入った経緯が書かれている。『教行信証』にも書かれている建仁元年辛酉の年(1201年)のことである。この1201年も1921年も辛酉の年で、辛酉の年は古来より革命の年とされ江戸時代まで改元が行われてきた節目の年

である。『日本書記』における神武紀元も辛酉の年で、日本の歴史の原点とされている年である。

親鸞が法然門下に入った経緯は以下のように書かれている。「やまをいで、六かくだうに百日こもらせ給て、ごせをいのらせ給けるに、九十五日のあか月、しやうとくたいしのもんをむすびて、じげんにあづからせ給て候ければ、やがてそのあか月 いでさせ給て、ごせのたすからんずるえんにあいまらせんと、たづねまいらせて、ほうねん上人にあいまいらせて、又六かくだうに百日こもらせ給て候けるやうに、又百か日、ふるにもてるにも、いかなるたいふにも、まいりてありしに、たゞごせの事は、よき人にもあしきにも、おなじやうに、しやうじいづべきみちをば、たゞ一すぢにおほせられ候しを、うけ給はりさだめて候しかば〜(中略)〜このもんぞ、殿のひへのやまにだうそうつとめておはしましけるが、やまをいで、六かくだうに百日こもらせ給て、ごせの事いのり申させ給ける九十五日のあか月の御じげんのもんなり。ごらん候へとて、かきしるしてまいらせ候。」

ここにある「聖徳太子の文」、「示現(じげん)」、「御示現の文」が聖徳太子と関係のある部分で京都の六角堂への参籠によって聖徳太子に関係する何か起きたことを後に親鸞の妻となった恵信尼に親鸞が語っていたのである。『恵信尼消息』には「聖徳太子の文」の内容がなく「聖徳太子の文」について従来から二説ある。本願寺三世覚如の書いた親鸞伝記『御伝鈔』⁽⁹⁾にある「〜六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を示現して、白衲の袈裟を著服せしめ、廣大の白蓮華に端座して、善信に告命してのたまわく、行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂」の部分にある「行者宿報偈」と言われるものがその一つである。これについて『覚禅抄』に「如意輪観音」の靈験として同様の記述があることが指摘されている⁽¹⁰⁾。六角堂頂法寺の本尊は如意輪観音である。

もう一つは近つ飛鳥と言われる河内磯長の太子廟(叡福寺)に伝わる聖徳太子作「廟岬偈」⁽¹¹⁾と言われるもので太子廟も当時は四天王寺との繋がりが強かったとされる⁽¹²⁾。これは親鸞が『上宮太子御記』

に引用しており、「大慈大悲本誓願 愍念有情如一子 是故方便從西方 誕生片州興正法 我身救世觀世音～」で始まるものである。この両者は「行者宿報偈」にせよ「廟嶁偈」にせよいずれもすでに当時知られていたものである。そのことからすればすでに親鸞が知識としてもっていたものが参籠の中で夢告としてあらためて聖徳太子から与えられ、それにより単なる知識ではなく真実のものとして受け取られた可能性がある。その場合「行者宿報偈」を先に太子の夢告として受け取れば、太子作とされた「廟嶁偈」もあらためて親鸞の意識に上り両者が一体のものとして意識された可能性があるだろう。

『御伝鈔』での「救世菩薩」に当たるものは、親鸞の『皇太子聖徳奉讃』（七十五首和讃）では「(四) 六角の精舎つくりてぞ 閻浮檀金三寸の 救世觀音大菩薩 安置せしめたまひけり」と書かれている。六角堂にこもったことからすれば六角堂の本尊は重要なはずである。一方で『皇太子聖徳奉讃』には四天王寺系の資料の影響が強いことを述べたが、四天王寺の救世觀音については「(二七) 敬田院に安置せる金銅の救世觀音は 百濟國の聖明王 太子滅後のその、ちに」「(二八) 戀慕渴仰せしめつ、 つくりあらはす尊像を 阿佐太子を敕使にて きたりましますかたみなり」「(四一) 阿佐太子を敕使にて わが朝にわたしたまひし 金銅の救世觀世音 敬田院に安置せり」「(四二) この像つねに歸命せよ 聖徳太子の御身なり この像ことに恭敬せよ 彌陀如來の化身なり」と書かれている。先に述べた「戀慕渴仰」がここにあり、これは親鸞自身の心情を吐露しているのではないかと思われる。そして「(四二) この像つねに歸命せよ 聖徳太子の御身なり この像ことに恭敬せよ 彌陀如來の化身なり」では、「戀慕渴仰」の心情は本来は聖徳太子に対してのもののはずが「この像つねに歸命(ことに恭敬)せよ」と救世觀音像そのものに向けられている。

日本人としては日本人である聖徳太子像は日本で作られた仏像であってほしいようにも思えるが、七高僧が三国伝来の仏教を象徴するように国境を越えた聖徳太子信仰が百濟からもたらされた救世觀世音像にあると言える。それはまた親鸞が和讃で言及す

る聖徳太子がインドで『勝鬘經』を説いた勝鬘夫人、さらに中国の南嶽慧思の生まれ変わりであるとする信仰にも関係するはずである。聖徳太子は一人で七高僧と同様にインド、中国、日本の三国、さらに朝鮮半島と、アジア全域を繋ぐ存在で、『十七条憲法』に言う「万国極宗」としての仏教を体現する存在であることをこれらのことは示していると言えるだろう。

親鸞がこのように特定の仏像に強い思い入れを示すのは希有のことである。『教行信証』では形のないもの、阿弥陀仏で言えば仏像として形になるものより「本願」という精神そのもの、心そのものへの志向が中心でそれが本願念仏になる。親鸞の名号本尊^(四二)にそれが反映している。四天王寺にも日想觀という觀想念仏があり、仏像のように具体的な形をもつものは觀想念仏では重要になるが、親鸞において觀想念仏は高い位置づけを与えられていない。この和讃では「彌陀如來の化身」として阿弥陀仏信仰との整合性をとるが、「彌陀如來の化身」だから「帰命・恭敬せよ」というより先に聖徳太子信仰がありそれを阿弥陀仏信仰に結び付ける形だろう。六角堂参籠から法然への帰依の道筋もその形になっている。

そしてその参籠の経緯が妻である恵信尼に語られ、妻との結婚により子息が生まれ、さらにそれが最晩年になって『四天王寺縁起』にある「父子義絶」になったということは、親鸞としてはその一生が聖徳太子に予見されていたと受け取ってもおかしくはない。『御手印縁起』の名が示すように自分の一生が太子の掌の中にあるように思われただろう。

『皇太子聖徳奉讃』（七十五首和讃）より後に作られた『皇太子聖徳奉讃』（十一首和讃）では聖徳太子を父母のように慕う心情が書かれている。それはこの世での親子関係が場合によっては「父子義絶」に至るものであるような「仮」のものに対して、そうではない「真」のものがあることを示しているように見える。それは次のようなものである。「(八四) 救世觀音大菩薩 聖徳皇と示現して 多々のごとくすてずして 阿摩のごとくにそひたまふ」「(八五) 无始よりこのかたこの世まで 聖徳皇のあはれみに 多々のごとくにそひたまひ 阿摩のごとくにおはします」「(八八) 大慈救世聖徳皇 父のごとくにおはし

ます 大悲救世観世音 母のごとくにおはします」。「多々」は父、「阿摩」は母である。またここには『惠信尼消息』にもある「示現」を親鸞が「聖徳皇と示現して」と使っている。惠信尼が親鸞から聖徳太子と結び付いた形で「示現」を聞いたのは確かだろう。こう詠むときに親鸞の目に浮かぶ聖徳太子の姿は四天王寺の救世観音像だったと思われる。京都の六角堂で四天王寺の救世観音像と同様の姿の聖徳太子の示現を得たとするのは場所が違うのではないかとも思えるがそうとしか言いようがないものが事実としてあったのだろう。

それほど親鸞が慕う四天王寺の救世観音像はどのようなものだったのか。これが法隆寺の救世観音像なら現在も目にすることができるが四天王寺ではそうはいかない。すでに指摘されていることだがその手がかりになるのが心覚の『別尊雜記⁽¹³⁾』の「四天王寺救世観音像^(図3)」である。時代的にはこれが親鸞が慕ったものとしての可能性が高いものである。この像は印象としては男性的な像である。また像容としては法隆寺の救世観音像と大きく異なり、四天王寺の救世観世音像は観音像と言うよりは弥勒菩薩半跏像ではないかと思われる。弥勒菩薩半跏像として有名なのはこれも聖徳太子創建の伝承をもつ太秦の広隆寺の弥勒菩薩半跏像^(図4)である。法隆寺の救世観音像^(図5)よりは広隆寺のものに近い像容だろう。これについては「『御手印縁起』成立の時点では天智朝に安置された弥勒菩薩が本尊とされ、救世観音、また百濟からの請来金銅仏として信仰を集めていた⁽¹⁴⁾」という藤岡穰氏の指摘がある。

『皇太子聖徳奉讃』（十一首和讃）の冒頭は「(八三) 佛智不思議の誓願を 聖徳皇のめぐみにて 正定聚に歸入して 補處の彌勒のごとくなり」という和讃である。本願と聖徳太子と弥勒が結び付けられ、「歸入して」「ごとくなり」というのは親鸞自身のこと、自身が太子和讃に組み込まれ、太子のみならず自身を詠んでいるようにも見える。この「補處の彌勒」は親鸞思想において重要な念仏者は弥勒菩薩と同じという思想である。仮説だが親鸞は形として弥勒菩薩像と思われる四天王寺の救世観音像⁽¹⁵⁾を強く慕い続けた結果、自身が弥勒菩薩と同じであるという

認識に至ったと言えないだろうか。別の言い方をすれば無意識の内に観想念仏と同様のことをしていたということである。『尊號眞像銘文』に聖徳太子像に添えられたと思われる「皇太子聖徳御銘文」があり、どのような像かわからないが『別尊雜記』にあるような絵像が手元にあった可能性があるかもしれない。「この像つねに歸命せよ」としていることから「つねに歸命」するためにはその可能性が高いと思われる。また手元にはなくてもイメージとして思い続けられれば観想念仏と同様になる。むしろ観想念仏としてはイメージが中心で仏像はそれを得るための補助になる。観想念仏と同様としてもそれは「行」としてしたのではなく「戀慕渴仰」の心情の帰結として自ずから起こったことで見続ける内に四天王寺の救世観世音像は聖徳太子と弥勒菩薩と親鸞とが重なって見える像になっていったと言えないだろうか。あるいは弥勒との関係はないにしても四天王寺の救世観音像への思慕は無意識の内に観想念仏と同様の観仏をさせ、さらに言えばそれは『観無量寿経』にあるような自力的な観想念仏ではなく「戀慕渴仰」という一種の引力が引き起こし、引き寄せられたものという点では聖徳太子から与えられたものなので自力ではなく本願力の表れとも言えるだろう。その意味で観想念仏のようでも実質は本願力によって引き起こされる本願念仏になっていると言えるだろう。これを聖徳太子における「廟嶁偈」で言えば冒頭の「大慈大悲本誓願」の働きであると言えるだろう。

聖徳太子作と信じられた「廟嶁偈」が「大慈大悲本誓願」から展開し、法然への帰依を『教行信証』に「雜行を捨てて本願に歸す」と記すことからすれば「本願」の働きの中に聖徳太子信仰も阿弥陀仏信仰も含まれているとも言えるだろう。このことは親鸞の人間像と関係し、親鸞を「本願」を根本原理とする本願思想家として考えると、「本願」を根本原理、根本精神とする本願思想と言うべき「本願」中心の親鸞思想が形成される上で「廟嶁偈」が果たした役割は大きい。それが法然門下入門の出発点からあったとすれば太子によりはじめから到達点も示されていたことになる。そう考えると親鸞が本願思想家として自己形成する上で「廟嶁偈」もまた思想的に「未来記」

の役割を果たしたと言えるだろう。本願思想の中に阿弥陀仏信仰も聖徳太子信仰もあるという理解も可能に思われる。

四 まとめ

以上見てきたようにおそらく法然門下に入る前からまた入門の時点からさらに最晩年に至るまで親鸞にとって聖徳太子信仰は一貫して重要な位置を占め

ており、阿弥陀仏信仰さらには本願思想に包摂される形をとりながら、親鸞の聖徳太子信仰は四天王寺における聖徳太子信仰と深い関係をもちつつ親鸞自身を導いていたことがわられるのである。

なお本稿でも触れた聖徳太子の時代に起きた排仏と親鸞の経験した法難は親鸞にとっては深い関係があると思われる。ともに「謗法」の問題として大乘仏教においても親鸞においても重要なテーマであり、今後の課題としたい。

(註)

- (1) 『浄土真宗聖典全書二 宗祖篇上』(本願寺出版社、2011年) p537~p550
- (2) 前掲書 p553~p572
- (3) 前掲書 p511~p516
- (4) 『大日本仏教全書寺誌叢書第二』 p58~p64「四天王寺御手印縁起一卷」。
榊原史子『『四天王寺縁起』の研究』(勉誠出版、2013年) p16~p25『『四天王寺縁起』原本』(本文引用は後者の「原本」による)。
- (5) 『聖徳太子と四天王寺』(法蔵館、2021年)所収、南谷恵敬「『四天王寺縁起』と『大同縁起』」 p81
- (6) 『浄土真宗聖典全書二 宗祖篇上』 p254
- (7) 武田賢寿「親鸞聖人の太子信仰の形成と四天王寺」(真宗研究 23号、1979年)。廣田至「親鸞と物部守屋」(大谷大学研究紀要 37号、2020年)、廣田至「親鸞の聖徳太子観」(博士論文、2022年)。
- (8) 『浄土真宗聖典全書二 宗祖篇上』 p1029~p1047
- (9) 『浄土真宗聖典全書四 相伝篇上』(本願寺出版社、2016年) p75~p108
- (10) 名畑崇「親鸞聖人の六角夢想の偈について」(真宗研究 8号、1963年)
- (11) 『浄土真宗聖典全書二 宗祖篇上』 p1005
- (12) 榊原史子『『四天王寺縁起』の研究』(勉誠出版、2013年) p293
- (13) 『大正新脩大藏経図像部三』 p227
- (14) 『聖徳太子と四天王寺』(法蔵館、2021年)所収、藤岡穰「四天王寺金堂本尊の姿を求めて—資料と模刻像の再検討—」 p49~p52。『聖徳太子伝私記』に「天王寺金堂観音座中、有弥勒云日記在之、慈円僧正の時見出給云々。」(『聖徳太子全集第二巻』臨川書店、1988年、p254)とある。
- (15) 聖徳太子と弥勒像について。長田智龍「親鸞と弥勒菩薩」(真宗研究 13号、1968年)参照。
金丸(岩崎)和子「弥勒の造形の諸相 韓国と日本」(博士論文、2014年)所収「宝冠弥勒と聖徳太子信仰」参照。後者に広隆寺の「太子本願御形」とされる宝冠弥勒について「宝冠弥勒は、弥勒ではあるが、聖徳太子でもあるのだということになる」と述べられ、また「太子との関わりの深い四天王寺と広隆寺に於いて、太子の姿を半跏像と重ね合わせた信仰が、早くから存在したことになり、両寺ともその後の太子信仰の中心的寺院となるのである」と述べられている。

(主要参考文献)

- 『聖徳太子全集』全四巻、臨川書店(竜吟社1942年~1944年復刊)、1988年
『聖徳太子集 日本思想体系2』岩波書店、1975年
『聖徳太子尊像聚成』石田茂作、講談社、1976年
『聖徳太子信仰の美術』大阪市立美術館監修、東方出版、1996年
『浄土真宗聖典全書』全六巻、本願寺出版社、2011年~2019年
『真宗聖教全書』全五巻、真宗聖教全書編纂所編、興教書院(大八木興文堂再版)、1940年~1944年
『増補 親鸞聖人眞蹟集成』全十巻、法蔵館、2005年~2007年
『真宗重宝聚英』全十巻、同朋舎メディアプラン、2006年

(図)

- (図1) 『西本願寺展』図録(東京国立博物館編、NHK、2003年) p80、『真宗重宝聚英第七巻聖徳太子絵像・絵伝・木像』(同朋舎メディアプラン、2006年) p33
- (図2) 『西本願寺展』図録 p76にカラー図版、『真宗重宝聚英第一巻名号本尊』(同朋舎メディアプラン、2006年) p143にモノクロ図版
- (図3) 『別尊雑記』(『大正新脩大藏経図像部三』 p227)
- (図4) 『広隆寺』(広隆寺) p10
- (図5) 『法隆寺』(法隆寺) p37